

# “地域カリスマ”の活力に関する解釈学的研究： インタビューを通じた「観光カリスマ」の実践描写

羽鳥 剛史<sup>1</sup>・藤井 聡<sup>2</sup>・住永 哲史<sup>3</sup>

<sup>1</sup>正会員 東京工業大学助教 土木工学専攻 (〒152-8552 東京都目黒区大岡山2-12-1-M1-11)  
E-mail:hatori@plan.cv.titech.ac.jp

<sup>2</sup>正会員 京都大学教授 都市社会工学専攻 (〒615-8540 京都市西京区京都大学桂4)  
E-mail:fujii@trans.kuciv.kyoto-u.ac.jp

<sup>3</sup>正会員 株式会社大林組 生産技術本部 (〒108-8502 東京都港区港南 2-15-2 品川インターシティ B棟 28階)  
E-mail:suminaga.tetsushi@obayashi.co.jp

地域づくりやまちづくりを成功に導く上で、ごく少数、場合によってはたった一名の“地域の問題に熱意を持って取り組む人”の存在が極めて重要であることが経験的に知られている。事実、国土交通省は、様々な地域の観光振興に尽力した人々を選定する“‘観光カリスマ百選’選定委員会”を平成14年～16年度に設定し、その中で“100人のカリスマ”を選定している。本論文では、具体的な人物による実践を総体的に描写・叙述する「解釈学的方法」の重要性を指摘した上で、“観光カリスマ”へのインタビューを実施し、そこで語られた「生の体験や経験」を解釈し、それを物語的に記述することによって、“カリスマ”をその実践に突き動かした根源的活力の理解の一助となり得る論考を述べる。

**Key Words** : “charismas of tourism”, hermeneutical study, vitality, narrative, interview survey

## 1. はじめに

### (1) 問題

地域づくりやまちづくりを成功に導く上で、ごく少数、場合によってはたった一名の“地域の問題に熱意を持って取り組む人”の存在が極めて重要であることが経験的に知られている<sup>1)</sup>。事実、国土交通省は、様々な地域の観光振興に尽力した人々を選定する“‘観光カリスマ百選’選定委員会”を平成14年～16年度に設定し、その中で“100人のカリスマ”を選定している<sup>2)</sup>。ここで選定された“カリスマ”はそれぞれ地域固有の問題に向き合いながら、地域のために献身的に振る舞い、地域振興や観光振興に多大な貢献をなしている。

それでは“観光カリスマ”を地域への献身的な活動に突き動かした“活力”とはいかなるものであったのだろうか。無論、ここに言う活力とは、物理的な力というよりも、人間精神そのものであり、「生そのものが力への意志である」<sup>3)</sup>と論じたニーチェに倣えば、それは人間の“生”に他ならないものと言い得る。地域の問題

に直面し、様々な苦労を経ながらも、決然たる意志をもって事態を打開する精神の在り様にこそ、“カリスマ”の活力の本質があると言えよう。ただし、そうした

活力なるものを理解するにあたっては、そこで得られた確証に基づいて全ての認識が構築できるような所謂「アルキメデスの点」(すなわち、ものごとを理解する上で絶対的な出発点)は存在せず、“カリスマ”の活動する現実世界から隔絶した視座からその活力を理解することは著しく困難(あるいは原理的に不可能)であるという点が危惧される。なぜなら、例えばディルタイらによる解釈学上の哲学的議論を踏まえるなら、人間の生や力とは本来的に、現実世界の中で自己を理解すると同時に、自己が生きる場所の現実世界を理解していくことでしか自己や世界を理解し得ぬような解釈的存在であると言わざるを得ないからである。それ故、我々は現実世界の中にあってはじめて、当該の“カリスマ”の活力、あるいは、生や力を理解すると同時に、他者に伝達可能な形で記述する可能性を手にすることができるものと期待されるのである<sup>4)</sup>。それ故、“カリスマ”の活力を理解する上では、研究者自身が、“カリスマ”が住まう現実世界に降り立ち、その社会の常識の共有を図りながらも、その上でなおかつ客観的な立場<sup>1)</sup>から“カリスマ”の経験を解釈することが重要であると考えられる<sup>2)</sup>。そして、“カリスマ”の生きる経験とはそれ自身が解釈の産物であることを踏まえれば、以上のことは「解釈を解釈す

る」こととも言い換えることもできよう。そうした方法論は、実証主義を批判したシュライエルマッハーやディルタイに端を発し、これまでシュッツやリクール、そしてガダマーやギデンズらによって支持されてきた「解釈学的方法」と呼ばれるものである<sup>96)</sup>。

以上の問題意識の下、本研究では、前述の“観光カリスマ”へのインタビューを実施し、そこで語られた「生の体験や経験」を解釈し、その“実践”を物語的に描写・叙述することによって、“カリスマ”をその活動に突き動かした根源的活力への理解を深めることを試みる<sup>97)</sup>。そうした“カリスマ”についての物語的記述は、その実践についての単なる客観的事実の羅列やレポートでは伝わりきれない、より本質的な理解、あるいは共感を促しうるものと期待されるからである。そして、そうしたより本質的な理解や共感、例えば土木技術者の実践のために不可欠な“活力”の増進に寄与する可能性も期待されることである。この点については、ディルタイらによる解釈学上の論考<sup>98)</sup>において、人々の生の実践を記述した「物語」が、その読み手に彼ら先人の経験を追体験する機会を与え、そのことを通じて、彼らの思いや意志が読み手に「伝染」し得る可能性が指摘されていることから示唆されているところである<sup>99)</sup>。そうした物語とそこに宿る“カリスマ”の活力に対する「理解」や「共感」と、それを通じた思想や意志の「伝染」にこそ、本研究において、解釈学的方法に基づいて“カリスマ”の実践描写を行うことの重要な実践的意義があり得るものと思われる。この認識の下、本研究では、国土交通省によって“観光カリスマ”に選定された齋藤文夫氏（川崎市観光協会連合会会長）、加藤文男氏（千葉県南房総市企画部長）、船木上次氏（萌木の村(株)代表取締役社長）の3名にそれぞれインタビューを行った。そして、インタビュー調査を踏まえて、筆者ら自身の解釈を通じて、3名のこれまでの経験を描写・叙述することを試みた。

## (2) 「観光カリスマ」選定理由

齋藤氏、加藤氏、船木氏が国土交通省によって「観光カリスマ」として選定された理由は以下の通りである。

### a) 齋藤文夫氏

『齋藤文夫氏は、東海道の宿場として栄えた川崎宿の復興をめざし、川崎市の観光振興に寄与するために、私財を投じて江戸風の「川崎・砂子の里資料館」を開設した。また、地域の有志を募り二度にわたって市民の手作りによる「大川崎（宿）祭り」を成功させ、市内外に「川崎宿」の存在を知らしめ、川崎市のイメージアップに貢献している。現在は、川崎市観光協会連合会会長として、観光不毛の街であった川崎市を「観光都市・かわさき」へと市民レベルから育てていくことに全情熱を傾

けている』<sup>2)</sup>。このような功績により、第7回観光カリスマ選定委員会（平成16年10月19日）において観光カリスマ（カリスマ名称：東海道川崎宿復興に情熱を注ぎ、川崎のイメージアップに挑むカリスマ）に選定された。

### b) 加藤文男氏

『加藤文男氏は、「道の駅とみうら・枇杷倶楽部」の初代駅長として、計画の立案から、開設後の運営管理に取り組み、特産の枇杷を活用した商品開発や、集客資源を広域的に束ねて誘客する「一括受発注システム」を稼働させ、地域経済を拡大させるとともに道の駅運営法人の黒字経営を持続させた。また、人形劇などの地域文化の磨き出し、インターネットを活用した広域情報の発信による地場産業振興など、多角的な手法で広域的な地域振興にも努めた』<sup>2)</sup>。このような功績により、第7回観光カリスマ選定委員会（平成16年10月19日）において観光カリスマ（カリスマ名称：道の駅と広域連携のカリスマ）に選定された。

### c) 船木上次氏

『船木上次氏は、清里の急激な開発と没落を全て目の当たりにしながらも、清里を本物のホスピタリティーと感動を与えることができる地域文化のある観光地にするべく、人材育成やバリエコンサートの開催等地道に独自の活動を続け、流行に流されず清里の活性化に貢献した』<sup>2)</sup>。このような功績により、第2回観光カリスマ選定委員会（平成15年2月21日）において観光カリスマ（カリスマ名称：開拓魂のカリスマ）に選定された。

以下、2章、3章、4章において、インタビュー調査を基に、それぞれ齋藤氏、加藤氏、船木氏についての“実践描写”を記述する。

## 2. 齋藤文夫氏の実践描写

### (1) 「文化不毛の地」からの出発

かつて東海道の宿場町として栄えた川崎は、明治時代を境に、産業の要地として脚光を浴びるようになり、その結果、多くの工場が立ち並び、日本の近代化を牽引する一大産業都市にまで成長した。その一方で、観光の面では、目立った取り組みがなされず、いつしか川崎は「観光不毛の地」、「文化不毛の地」という不名誉な名で呼ばれるようになった。そんな中、1981年に、当時神奈川県議員であった齋藤文夫氏に、川崎大師観光協会会長の任に就くよう要請があった。そして、齋藤氏はその任を務めることとなるが、同氏は当時を振り返り、「文化不毛の地川崎をいかに文化度の高い街にするか」が何よりの課題であったと認識されていたとのことである。



図-1 東海道川崎宿周辺の史跡

(「かわさき区の宝物シート：川崎宿」より抜粋。川崎区より資料提供。図中央の赤線部が旧東海道。)

## (2) 歴史認識の希薄化に対する危機感

しかし、川崎には誇るべき観光資源が存在しないわけではなかった。それどころか、川崎には、江戸時代に東海道川崎宿として多くの旅人が往来し、様々な偉人や史実に彩られた歴史がある(図-1 参照)。例えば、江戸時代に甘蔗糖の農地開発に尽力し、時の将軍吉宗から感謝状を贈られた池上幸豊や、呉服商人の身分にありながら、多摩川の氾濫を防ぐために、幕府に民間省要を建白し、見事に改修事業を成し遂げ、その功により2万石の大名となった田中丘隅をはじめとして、川崎には様々な偉人が輩出されており、そうした人物にまつわるエピソードや史実も残されている。また、大治3年(1128年)に川崎大師が開創されて以来、大師周辺は多数の参拝客で賑わい、多くの店が軒を連ねる門前町として栄えてきた。明治5年(1872年)、我が国で最初の鉄道が新橋・横浜間に開通した際に、川崎に鉄道駅が設置されたのも、この様に古くから栄えてきた川崎大師の存在によるところが大きかったようである。さらに古くは、奈良・平安時代に旧街道が川崎を通っていたと伝えられており、官衛(かんが、役所跡)や古墳等の遺跡も発掘されている。

斎藤氏は、先祖代々川崎に居を構える旧家に生まれ、そうした川崎の古い歴史を肌身で感じながら育った。しかし、斎藤氏は、「自分の住んでいる街にどういふ誇りの持てる歴史があるかということ」を多くの人が知らない」という指摘にも示されるように、川崎に住む人々が川崎の歴史や文化を忘れつつあることに強い危機感を抱いておられた。そしてそれと共に、そうした歴史や文化が培われてきたことは誇り得ることであるという認識を、住民に持ってほしいとの思いを、強くお持ちのようであった。以下に詳しく述べるように、斎藤氏は川崎大師観光協会会長の任につかれたことを重要な契機として様々な活動を展開していくこととなるのであるが、その背景にはこうした地域の歴史や文化に対する個人的な強い「思い」があったことは間違いのないところであろう。

以下、その様子をさらに詳しく描写することとしよう。

## (3) 歴史的・文化的地域事業の実践

さて、川崎大師観光協会会長に就任した斎藤氏は、そうした思いを携えつつ、川崎の歴史や文化にまつわる様々な取り組みを企画・運営し、川崎の観光振興に取り組んでこられた。まず、斎藤氏は1995年に、地元の故事に倣い、酒飲み合戦を実演する「水鳥の祭」を開催した。この祭りは、江戸時代(慶安2年、1649年)に、川崎の名主であった池上幸広と江戸の儒学者であった茨木春朔とが大師河原で三日三晩にわたって酒呑み合戦を繰り広げたという物語が、江戸時代の仮名草子「水鳥記」に綴られており、その史実に由来するものである。そして、地元の宮司(若宮八幡宮)と商店街の会長とが、斎藤氏にこの地元に纏わる史実を伝えたことがきっかけとなり、この物語を現代に再現する運びとなったことである。地元商店街の協力の下、当時の合戦の様子を再現するこの試みは、多くの見物客を集め、第一回開催から2009年現在で15回目を数えるまでになった。なお、斎藤氏は、第一回目の開催以来、この催しに物語の主人公である池上氏の御子孫を招待されているとのことであった。ここからも川崎の歴史を大事にされたいとの同氏の強いお気持ちを感じ取ることが出来る。

また、斎藤氏は1996年から毎年7月に、川崎大師の境内で「風鈴市」の開催を始めた。この風鈴市は、斎藤氏が、当時の川崎大師の貫主(故高橋隆天氏)から、毎年初詣には300万人にも上る参拝客が川崎大師を訪れる一方で、夏の期間には主だった催しもなく、人々の行き会いも少なくなることから、夏の時期に活気ある地域の催しを行うことは出来ないものか、との相談を受けて始めたそうである。この催しでは、斎藤氏の指揮の下、川崎大師周辺の店主が中心となって全国各地の風鈴を探して回り、店主自らが展示、販売を行っていることである。そうした尽力の甲斐もあって、開始当時は200種類程の風鈴を集める程であったが、14回目を数える今年(2009年)の風鈴市では、全国の都道府県から880種類、述べ3万個もの風鈴を取り寄せるとなり、来訪者も30万人に上り、川崎大師の夏の風物詩として定着しつつある。

また近年では、斎藤氏の支援の下、地元商店街の若い人達を中心となって、昭和レトロの街並みを再現し、メロン、ベイゴマ、竹馬等の昔ながらの子供の遊びを体験してもらう「楽大師」が毎年4月に開催されており、家族連れで参加する人も多く、地域住民皆で参加できる地域イベントとして盛り上がりを見せている。

斎藤氏は、この様な催しを企画・運営される一方で、川崎大師の歴史や文化を多くの人々に知ってもらおうと

地元の有志を集め、2000年に「川崎大師観光ガイドの会」を発足させた。その後、斎藤氏はこの会を発展させる形で「かわさき歴史ガイド協会」を発足させた。そして同氏は、少しでも多くの人々が川崎を訪れた人々に地元の歴史や文化を案内できるようにとの思いから、自らガイド養成のための講習会に出向く等、この協会の取り組みに積極的に貢献してこられた。

#### (4) 「大川崎宿祭り」の成功

そして、2001年には、斎藤氏が中心となり、東海道川崎宿の復興を願って「大川崎宿祭り」が開催された。この年は、東海道宿駅制定400周年に当たる年であり、各地で記念イベントが予定されていたが、その一方で、川崎では、当初、主だったイベントは企画されていなかったそうである。そうした中で、斎藤氏は、隣町の品川で盛大な記念イベントが企画されていることを知り、川崎でも地元を挙げて川崎宿を記念する催しを行わなければならないと思い立ったとのことである。その背景には、「東海道川崎宿に対する地元の人々の認識が低くなりつつある」ことに対する憂慮の念があったことは、これまで述べてきた通りである。斎藤氏は、この企画を思い立つや否や、地元の有志を募って「大川崎宿祭り」実行委員会を組織するとともに、地元の企業や商店街に自ら出向いて回り、その運営資金を募ったとのことである。そして、斎藤氏自らが旗振り役となり、次々とイベントを企画し、その実行に尽力してこられた。当時の実行委員会のメンバーの一人は、斎藤氏の企画を見て、「こんなに沢山の行事を我々だけで果たして出来るのだろうか」と半信半疑であったと述べている（大川崎宿祭り実行委員会、2002<sup>7)</sup>。しかし、委員会での斎藤氏の「命懸けでやる」との言葉が、委員一人一人の気力を奮い立たせたとのことである。そして、斎藤氏を始め、実行委員の方々の奮闘の末、遂に2001年5月に、「大川崎宿祭り」の開催を実現させることに成功した。

この祭りでは、川崎宿を代表する「万年屋」を再現し、六郷橋の袂で「六郷の渡し」を復活させる等、当時の川崎宿の様子を再現する様々なイベントが実施された。特筆すべきは、これらのイベントは全て、外部委託に頼らず、斎藤氏ご自身が中心となって、企画から発注に至るまで取り仕切られたとのことである。その中でも、川崎競馬場から八丁畷までの沿道を15万人の人が埋め尽くす中、江戸時代の大名行列を再現した歴史仮装行列が行進するという大パレードが、市民の参加により実現された。このパレードは、川崎市の市民レベルの行事としては前例の無い壮大な催しとなった。この仮装行列について、斎藤氏は、江戸時代にこの東海道を通過していた大名行列を自分達の祖先が拝みながら見送っていたであろう姿を子供時代からよく思い描いていたとのことである、

「ここ（東海道川崎宿）でもって我々の祖先はへーって平つくばって（参勤交代の）大名行列を見送っていたわけですよ。…（その）大名行列を見てやろう、っていうのが、僕なんかは子供の時からの夢でしたよ。それを実現した。」

そしてこの祭りを通じて、地元を中心に、「東海道川崎宿を活かした地域活性化方策検討委員会」が立ち上がり、この祭りがその後の川崎宿復興に向けた様々な運動のきっかけとなった。

#### (5) 私財を投じて「砂子の里資料館」を開設する

斎藤氏はこのようなイベントの企画運営に精力的に取り組む傍ら、2001年には、旧東海道に面した自宅の前面を自ら私財を投じて江戸風のなまこ塀を模した壁に改装し、浮世絵の資料館「砂子の里資料館」を開設された。この資料館では、ご自身で収集した浮世絵が無料で公開されている。そして、毎月様々な展示の企画が実施されており、ご自身で作成したカラー刷りのパンフレットも見学者に無料で配布されている。この資料館の改装工事について、斎藤氏は「川崎宿の街並みや雰囲気を持し、後世に伝えることがそこに住む者にとっての重要な責務である」と語っておられ、ここに同氏の一人の歴史的社会的存在としての強い義務感が感じられる。そして、斎藤氏のそうした思いは周囲に少しずつ浸透しつつあり、同氏の取り組みを受けて、店構えや看板を立て替えるお店も出てきているとのことである。

このような功績から、斎藤氏は川崎市観光協会連合会の会長に推薦された。そして、2003年4月に会長に就任した斎藤氏は、以前にも増して川崎市全域にわたる観光振興に精力的に取り組むこととなった。まず、当時観光協会が無かった幸区及び宮前区に地区観光協会を設立された。そして、川崎を訪れた人に「川崎にも観光の場所がある」という認識を少しでも持ってもらえるように、斎藤氏の指示の下、川崎市内の駅前に観光案内所や案内パネルが設置された。そうした斎藤氏の尽力の甲斐あって、現在では各観光協会がお互い切磋琢磨し、区や市の行政と協力して、観光案内パンフレットやポスターを積極的に作成・配布する等、活発に活動するようになったとのことである。また、市制80年を迎えた2004年には、再び斎藤氏が中心となって「大川崎祭り」が開催され、3年前の大川崎宿祭りを超える人々が訪れ、大きな賑わいを見せたとのことである。

#### (6) 地域の誇りと歴史的使命感

斎藤氏は、インタビューにおいて、次のように語っておられた、

「（地域の住民が）自分の町に誇りを持てること。自分の

郷土を愛すること。これが一番大切（である）。」

しかし、「公害の街」「文化不毛の街」とも揶揄される川崎にあって、斎藤氏は、地域の住民が自分の住む町に誇りを持ってないことを痛感することが度々あったとのことである。しかしながら、川崎には先人達によって連綿と培われてきた歴史が存在することは前述した通りである。そして、斎藤氏は、川崎に住まう人々がそうした歴史を認識し、それに感動することがやがては「子々孫々の誇りになる」と語っておられた。そのためにも同氏は「努力をすることが大事」であるとの覚悟を持っておられた。そうした努力は「(小さな)一駒でしかない」と斎藤氏ご自身も認めておられるが、その一方で「その一駒が次の時代を開ききっかけになる」と語っておられた。そして実際に、斎藤氏の取り組みは、川崎が「文化不毛の街」から「歴史と文化の街」に転換する上での重要な契機となりつつあることは間違いないように思われる。この様に、斎藤氏が川崎の観光振興に尽力した背景には、川崎の歴史に対する深い思い入れの下、先人から引き受けた歴史や伝統を何とか後世に残し、地域の誇りを取り戻さんとする強い使命感があったことを窺い知ることが出来る。

ただし、斎藤氏は、様々な観光振興の任に就くにあたっては、必ずしも自ら進んでその任を申し出ているわけではないようである。このことについて、斎藤氏は次のように語っておられた、

「やっぱり人間関係（が大事）。何も役職が好きでね、…そんなことで（引き受けているわけ）じゃないんです。もう限界だと自分で思いながらもね、…死ぬまで頑張るやろうかなと。…やっぱり人ですよ。」

斎藤氏には周囲から多くの期待が寄せられており、依頼や陳情が跡を絶たないとのことであるが、信頼関係を第一と考える斎藤氏はそうした依頼を無下に断ることは容易ではない、とのことであった。それと同時に、斎藤氏の次の発言には、人々の要請に自らが応えなければならぬとの氏の強い義務感が感じられる、

「地域を活性化する。それは一人だけの力ではないが、誰かが太鼓を叩いて篝火を高く掲げて駆けなければ人は付いてこない。」

ただし、これまで培われてきた人間関係は、斎藤氏の数々の取り組みを成功させる上での支えともなっているように思われる。大川崎宿祭りをはじめ、斎藤氏の企画の多くは、なるべく業者に委託せず、自前で行っているとのことであるが、その背景にはそうした信頼関係に裏打ちされた惜しみない協力があつたとのことである——卓越した歴史感覚に裏打ちされ、逃れ難き人間関係からの要請に応え、そうした人間関係に支えられながら、斎藤氏の多大な貢献が生まれたと言えそうである。（イン

タビュー時期：2008年11月29日、2009年9月30日。インタビュー場所：斎藤氏のご自宅（「砂子の里資料館」）にて。）

### 3. 加藤文男氏の実践描写

#### (1) 町長の決断

千葉県富浦町は房総半島の南西端に位置する人口5,700人程の小さな町であり、房州枇杷や花卉等の温暖な気候を活かした農産物が地域の特産である。富浦町は、昭和50年代の初め頃までは、一夏に50万人近くの観光客が訪れ、毎年夏になると東京湾に面した砂浜は海水浴客で大いに賑わっていた。しかし、農産物の輸入自由化、バブル経済の破綻により、基幹産業であった農業や漁業の衰退に拍車がかかり、少子高齢化による過疎化も深刻化した。さらに、全国の高速度道路の整備が進捗するに伴い、富浦を訪れる観光客は20万人近くにまで落ち込んでいった。

そうした厳しい状況の中、「座して衰退を待つのではなく、一気果敢に打って出る」との町長の決断により、1990年、富浦町に「産業振興プロジェクトチーム」が設立され、その指揮を命ぜられたのが、地元の高校を卒業して以来ずっと富浦町役場に勤めておられた加藤文男氏であった。町長からの命令は、地域の産業と文化、情報化の振興拠点となる施設を整備し、尚且つ事業の採算を合わせる、という極めて困難なものであった。加藤氏は、当時のことを振り返り「どうやって運転資金を集め、原料を仕入れ、商売を行い、そして利益を出していくのか、一切分からなかったですね」と述懐されていた。

#### (2) 「枇杷倶楽部」の設立

それでも、「自分達の住んでいる地域は、本来、これほどまでに疲弊する地域ではない」と認識されていた加藤氏は、「手には余るけど、これしかない」との強い決意の下、1993年、千葉県で初の「道の駅とみうら・枇杷倶楽部」をオープンさせ、その初代所長を務めると共に、その運営母体として町が全額出資した「(株)とみうら」を発足させた(図-2参照)。この道の駅では、カフェを開業するとともに、自家工場を併設し、特産の枇杷を用いた商品開発に取り組み、それを現地で販売するという事業を開始した。なお、当初、町内のほとんどの人は、この事業が成功するとは考えていなかったそうであるが、加藤氏ご自身は、この事業の経営はうまくいくとの予感を抱いておられた。そして実際にも事業は軌道に乗り、黒字経営を維持することが出来たとのことである。



図2 富浦町と「道の駅とみうら・枇杷倶楽部」

(写真については、「枇杷倶楽部ホームページ<http://www.mboso-etoko.jp/top/biwakurabu/>)より抜粋。地図については、テクノ「日本白地図イラスト」より抜粋。)

### (3) 地域活性化の「歯車」

しかし、加藤氏は、道の駅の事業を行うだけで、この地域が本当に良くなるかどうかについて、当初から疑問を抱いておられた。同氏にとって、道の駅の事業だけでは「地域の歯車」が何か欠けている様に映ったそうである、

「地域の一番下の歯車をカッツて動かすためにはどうするか。(今のままでは)歯車が何か欠けていた。」

加藤氏は、その「歯車」を動かすためには、地域全体を巻き込んで「地域の資源を磨いて活用して、(またそれを)活用して磨かれる」ような事業を行う必要があると感じておられたとのことである。

そこで加藤氏は、道の駅のオープンとともに、花摘み園「花倶楽部」を開業し、そこで富浦の周辺農家に農産物を直売する機会を提供した。そしてそれと共に、地元技術者と協力し、直売に適した品種改良や苺栽培の導入に取り組みをはじめた。こうした取り組みは、観光入込込み数の増進に繋がるとともに、地元農家の活性化にも繋がると考えたからである。すなわち、「地域の一番下の歯車」を回すためには、地元産業との連携が不可欠であるとの“直感”があったのである。

しかし、その開業にあたっては、周囲の反対もあったとのことである。なぜなら、農業部門に進出して事業を展開しても、採算が合う経営を行うことは極めて難しいと予期されていたからである。事実、加藤氏曰く、「誰一人賛成しなかった」とのことである。そして実際にも、これらの事業は毎年赤字を出す等、その経営は困難を極めることとなる。

しかし、そうした事態を回避し、「地元の歯車」を実質的に回していくことを目指し、加藤氏は、地元の店舗や事業者との連携を図り、それまで広く分散していた観光資源を束ねることによって誘客を促進する「一括受発注システム」を提案し、その開発に尽力する。このシステムは、枇杷倶楽部が、南房総に点在する小規模な農園や飲食店等と連携を図るとともに、観光会社に対して企画営業を行い、集客の配分、代金の精算、クレーム処理までを一貫して行うというものである。現在では、電子システムが導入されているとのことであるが、当初、これらの業務はすべて枇杷倶楽部の従業員が手作業で行っていたそうで、観光シーズンには一日50件ものツアーの対応に迫られることもあり、多忙を極めたとのことである。

今回のインタビューにおいて、加藤氏は、このシステムを富浦(及び富浦を含む南房総全体)の「自律神経」と喩えておられた。そして、そうした「自律神経」を整えることを通じて、富浦(南房総)という「生命体」が有機的に機能し、活性化されることが重要であると語っておられた。ここからも、加藤氏が、枇杷倶楽部のみの拠点開発ではなく、それを通じて地域全体が活性化されることを重視されていたことを窺い知ることが出来る。そして、実際に、このシステムの稼働により、地元の飲食店、農園、観光事業者等の連携が深まり、ピーク時には年間5千台もの観光バスが訪れ、12万人ものツアー誘致に成功し、当初の苦しい経営の問題が解消したことは言うに及ばず、地元農家の重要な収入源ともなる等、著しい地域波及効果もたらされることとなる。

また、2000年には情報化の拠点として、加藤氏が中心となって、観光客への情報発信を図ると共に、地域内の連携を促進する目的で、枇杷倶楽部のイベントや地域情報等を発信するポータルサイト「南房総いいとこどり」が導入された。この取り組みでは、役場職員がホームページ1頁を無償で作成する「1世帯1ホームページ運動」を同時に展開し、インターネットに馴染みの薄い農家や高齢の事業者に歓迎されているとのことである。

### (4) 地域の誇りと文化事業の実践

加藤氏は、以上に述べたような産業振興に取り組むとともに、富浦に関わる様々な文化事業を企画し、その実施・運営に尽力してこられた。その事業内容については、それぞれ以下に述べる通りであるが、加藤氏がそれらの活動に取り組むに至った背景には、ある共通の狙いが一貫してあったことが分かる。すなわち、それは、富浦の人々に自分の住む地域にもっと誇りを持ってもらうことであつた、

「(文化事業を通じて)生きていく誇りが持てる地域になれ

ばいいと思っている。」

今回のインタビューにおいて、加藤氏は、例えば、富浦出身の人に「自分の住む町はどこか」と質問すると、「千葉県」「千葉県の南」「館山の隣」といった答えが大方返ってきて、「富浦」とまず最初に答える人はごく僅かであると苦笑しておられた。そのような状況において、加藤氏は、「富浦の人は自分の地域に対して誇りを持っていない（のではないか）」との懸念を抱いておられたそうである。そして、以下に述べる一連の取り組みは、「富浦に対する誇りを皆に持ってもらうこと」を最終的な狙いとしたものだったのだと述懐されておられた。

まず加藤氏は、地域への誇りを高める上では「まずは自分たちの地域のことを知ることから始める」ことが必要であると考え、そうした機会を提供する場として、1992年に「ウォッチング富浦」の企画を立ち上げた。この企画は、地域に住む自然や歴史の専門家アドバイザーの案内・指導の下、富浦の自然や文化を体験してもらう取り組みであり、これまで子供からお年寄りまで幅広い世代を対象に実施されてきた。この取り組みは、現在まで毎月一回行われており、2009年10月時点で、206回を数えるまでになり、200回時点で、延べ7,150人の参加者を集めている。

また、加藤氏は、南房総で地道な活動やユニークな活動をしている方のお話を聞く「枇杷倶楽部茶論」の企画・実施に取り組んでこられた。この取り組みの背景には、加藤氏が地元の講演会に参加した時の次のようなご経験があったとのことである。当時、地域で講演会を開催すると、東京をはじめ地域の外から講演者を招待することが多かったそうであるが、そうした講演者の中には、地域に根差した話をしないばかりか、住民を馬鹿にしたような講演をして帰る人も少なくなかったとのことである。加藤氏は、そうした講演を聞いて自虐的になる住民を見て、この地域は「あなた達（講演者）に馬鹿にされる地域ではない」と感じ、いつそのこと地元で活躍している人に講演をしてもらった方がこの地域のためには良いのではないかと思いついたことが、この取り組みを始めるきっかけであったとのことである。この取り組みも、1995年に始まって以来、現在で160回を数えるまでに至っており、これまで、医者、作家、音楽家、議員、起業家等、多方面に渡る方々に様々なテーマで講演してもらい、毎回好評を得ているとのことである。

さらに、富浦では1988年より地元まつわる人形劇を地域に根付かせる「人形劇の郷」づくり事業が行われていたが、加藤氏はこの事業を発展させる形で「富浦人形劇フェスティバル（現・南房総人形劇フェスティバル）」の企画・運営に主体的に取り組んでこられた。この取り組みは、もともと人形操作の第一人者（伊東万里

子氏）が富浦に住んでおり、地域活動に熱心であったことがきっかけで企画されたとのことである。そして、加藤氏ご自身でも活動資金を募り、フェスティバルの開催を実現させたとのことである。このフェスティバルは毎年夏に開催されており、今年で21回目を数え、富浦を代表する恒例事業として定着している。

このフェスティバルについて、加藤氏は、地域の子ども達に「本物（の芸術）を見せてあげたい。田舎ではなかなか本物を見られない」との思いを語っておられた。そして、そうした本物の芸術に触れることを通じて、子供たちが「見る目を持つ」「見識を深める」ことが、やがて地域に対する誇りの形成につながるのではないかと考えておられた。実際に、人形劇を演じる劇団の方から、富浦の子供たちは「反応すべきところできちっと反応する」との評判が立っているようで、そうした見識を養うことが、やがて地域の誇るべき文化の形成に役立つであろうと、加藤氏は語っておられた。

### (5) 逆風の声

加藤氏は、12年の歳月をかけてこれらの事業を企画、提案し、その実行においても中心的な役割を担い、それぞれの事業を軌道に乗せることに尽力してこられた。そして、そうした「枇杷倶楽部」の一連の取り組みが功を奏し、年間20万人にまで落ち込んでいた富浦の観光客数は現在100万人を超えるまでになり、またそれまでの夏一季型の観光地域から、年間を通じて観光客が訪れる地域となった。

この様に、様々な事業を着実に推進してきた加藤氏であるが、これまで必ずしも順風満帆に事が進んできたという訳ではなかったようである。そこには一部の人々からの様々な批判があったようである、

「自分達がどんなにこの地域に対する情熱を持って、世間のすべての人から評価されることはない。むしろアゲンスト (against) の風が吹いてきましたね。」

特に、枇杷倶楽部のような集客施設に観光客を誘致すると、前述したように、周囲の店舗との連携を図ることに努めたとしても、一部の店舗の売上げが下がる可能性を完全に排除することは難しく、そうした人々の理解を得ることは極めて困難であったとのことである。加藤氏曰く「今でも完全に理解が得られているかどうか分からない」とのことである。また、議会での一般答弁の矢面に立たされたこともあり、お金の無駄遣い等、様々な批判に曝されたとのことである。それでも反対者の意見を大事にした上で、他の人たちの期待に応えていくという活動を続けてこられたのが、この12年間であったと加藤氏は振り返っておられた。

## (6) 反骨の精神

しかし、そうした逆風の声は、必ずしも加藤氏の意志を打ち砕くものではなかったようである。むしろ「批判があった方が工夫するし、批判があった方が頑張れる」と加藤氏は語られているように、そこには逆風に負けんとする猛々しさが筆者には感じられた。そして、「世の中の人というのはね、自分が思うように評価する訳じゃないし、それが世の常だろう。仕方がない」と認識されていた加藤氏は、それでもこの事業を成功させる以外に富浦の生き残る道はないという強い信念を持っておられた。そして、何より、加藤氏にとって枇杷倶楽部で共に働く人達の存在が大きかったようで、そうした人達に支えられ、この事業は必ずうまくいくことを直感的に確信されたそうである、

「誰と勝負しているか、誰と闘っているか分からなかったけど、この勝負勝てる。」

それと同時に、一緒に働く人々を含め「この事業を守っていかねばならない」と強く感じられたとのことである。

加藤氏ご自身が語っておられるように、「前例がなく」、「誰もやりたがらない」、そして「楽しかったけれど、2度とはやれない」、それほどの仕事をやり遂げてこられたのは、逆境に負けない反骨の精神と、誇るべき、そして、守るべき地域の価値があったためではないかと思われる。(インタビュー時期：2008年12月8日、2009年10月8日。インタビュー場所：「道の駅枇杷倶楽部」(第1回インタビュー)、「南房総富浦ロイヤルホテル」(第2回インタビュー)にて。)

## 4. 船木上次氏の実践描写

### (1) 開拓の原風景

清里(山梨県北杜市)は、山梨県の北西部、八ヶ岳連峰の南麓に広がる標高1000mから1500mの高原地帯である。この地は、1938年、東京都の水瓶となるため小河内ダムの湖底に沈んだ村を追われた人々によって開拓された。当時、荒涼とした清里の原野を開拓する人々を支えたのは、後に「清里開拓の父」と呼ばれるポール・ラッシュ博士であった。関東大震災後のYMCA再建委員として1925年に来日したポール・ラッシュ博士は、翌年より立教大学に赴任し、その後1938年に、清里の地にキリスト教布教の拠点として青年研修施設「清里寮」を完成させた。そして、第2次世界大戦後、とりわけ貧しかった寒村清里の地において、高冷地農業のモデル農村を建設すべく尽力した。同博士は、アメリカの各地で献金活動を行い、資金を集め、農村センター、農業



図3 「萌木の村」村内図  
(「萌木の村」より資料提供。)

学校、農場、診療所、図書館等をこの地に設立するとともに、農村センターの仲間とともに高原野菜の栽培や乳牛の飼育に献身的に取り組んだ。

農村センターの農場長の息子として生まれた船木上次氏は、この清里の地で自分の父親とポール・ラッシュ博士、そしてセンターのスタッフに囲まれて育った。船木氏の活動の原風景には、彼らが貧しい中であっても生き生きと働いていた姿が焼き付いているとのことである<sup>8)</sup>。

### (2) ペンションブームの到来

1971年に、東京の大学を中退し、清里に戻った船木氏は、地元の若者が語り合える溜まり場を作ろうと、喫茶店「ロック」を開店した。そして、「ロック」の経営が軌道に乗った頃、ホテル「ハットウォールデン」をオープンさせた。ここには、若い頃にホテルマンを目指していたポール・ラッシュ博士の影響があったとのことである。

さて、船木氏がホテルをオープンさせた頃から、清里ではペンションブームが到来し、リゾート開発が急激に進められることとなった。高原の豊かな自然景観と、ポール・ラッシュ博士に始まる開拓の歴史が女性誌を中心にメルヘンチックに取り上げられ、突如脚光を浴びるようになったのである。当時の清里を取材した記事<sup>9)</sup>にも「至る所にヌイグルミ人形があふれており、ゾウのような巨大な牛を型取った建物の店などもあり」「その勢いはとどまるところを知らない」とあるように、清里には派手な店構えの土産物店やタレントショップが軒を連ね、全国から若者が大挙して押し寄せることとなった。そして、10年間で100軒を超すペンションが立ち並び、いつしか清里は「ミニ原宿」「メルヘンのメッカ」と呼ばれるようになった。そうしたブームの一方で、ポール・ラッシュ博士が設立した農業学校は、志望者が少なくなり、閉校に追いやられることとなる。

### (3) 「萌木の村」設立

しかし、船木氏は、ブームに乗って無秩序にペンションが立ち並ぶ状況を目の当たりにして、このままでは清里が個性のない観光地になってしまうのではないかという強い危機感を抱かれていたとのことである。今回のインタビューでも、当時の清里を述べられながら、次のように語っておられた、

「みんな便利さと経済性だけを追求して、本来手に入れなければいけないものを忘れてる」、

「多様な価値ではなく、（経済性という）一つの価値で色々なものを測って、それをモデルとして、そしてそれが正しいと決めつけているような気がしてならない。」

この様に、船木氏にとって、清里の急激なりゾート開発は、利益のみを追求した「乱開発」と映っていたようである。しかし、同氏は「地域はバランス（が大事）」と語っておられるように、経済性一辺倒ではなく、多様な価値のバランスを保ちながら、あるべき方向に向かっていくことが重要であるとの認識を持っておられた。そして、船木氏は、そうした理念を実現する受け皿として、1977年に「萌木の村」を設立する（図-3 参照）。「萌木の村」は、手作りの工房を中心にして、地道にもつくりを続ける若者に活動の場を提供することから始まった。

### (4) ペンションブームの終焉と文化事業の実践

平成の時代に入ると、船木氏が危惧していた通り、清里の開発ブームは、バブルの崩壊と共に終焉を迎え、観光客も徐々に清里から離れていった。観光客数はピーク時の6割程度にまで落ち込んだとのことである。そして、ペンションの経営者も元々ブームに単に便乗していただけのこともあって、そうした事態に為す術もなく、清里の地を去っていった。そして、繁盛していた駅前通りはシャッター街となり、清里の町は徐々に寂れていくこととなる。

この様に清里の開発ブームが終焉を迎える中で、船木氏は、観光のみに軸足を置いた清里の将来を憂い、地元根付いた文化を残す道を模索されていた。そんな折、船木氏は、地域づくりのヒントを得る目的で、清里の仲間と共にドイツのロマンチック街道に視察に出かけたが、そこで一台のオルゴールに出会うこととなる。当時、偉大な歴史に彩られたロマンチック街道を目の当たりにして、そのような歴史や文化を持たない自分達はどうかと思えばよいかと思いついて折、ミュンヘンのアンティーク市で出会ったのがこのオルゴールであったそうである。船木氏は、このオルゴールの音色を聞いた瞬間、「これだ」と直感したとのことである。同氏は、すぐにこのオルゴールを購入するとともに、1986年、萌木の村にオ

ルゴール博物館を創設し、世界各国のオルゴールの収集を始められた。このオルゴール博物館には、現在260点ものオルゴールや自動演奏楽器が並ぶまでになり、その中には、モーツァルトが自動演奏楽器用に作曲した2曲を演奏できる世界に一台しかない「モーツァルト・パレル・オルガン」も含まれており、船木氏のオルゴール収集は世界にも認められるものとなった。

その他、萌木の村では、船木氏を中心に、レストランや雑貨店等、様々な事業やイベントが実施・展開されてきた。そして、素焼き、革細工、彫金の手作り工房から始めた萌木の村は、現在では18施設を擁するまでとなり、年間入場者数も40万人にまで上り、清里への集客を担っている。

### (5) 「清里フィールドバレエ」の取り組み

その中でも、今年（2009年）で20年目を迎えたクラシックバレエの野外公演「清里フィールドバレエ」は、地元の協力を得ながら回を重ね、清里の「夏の風物詩」として定着しつつある。もともと船木氏の奥様が地元の子供達の教育のためにバレエ教室を主催されていたところ、日本のバレエの第一人者であった今村博明氏と知り合いになり、同氏が清里の自然に魅かれ、船木氏に野外公演を依頼したのが、この催しを始めるきっかけであったとのことである。野外の特設ステージで行われる幻想的な公演は徐々に人気を集め、1990年の開始当初、2日間の公演で観客は350人程度であったが、現在では2週間の公演で全国から1万2千人もの観客が集まるまでに成長した。また、公演期間中の周辺施設への宿泊客も6千人に上り、地域に大きな経済効果をもたらしている。

この様に「清里フィールドバレエ」の取り組みは、一見すると順風満帆に見えるが、別のインタビューにおいて、今日に至るまで「苦難の連続であった」<sup>10)</sup>と船木氏は振り返っておられるように、これまで公演を続けてこられた道のりは決して平たんではなかったようである。実際に、野外ステージで行われるため、天候次第で公演が中止になることもしばしばであり、何より過酷な自然環境の中で公演者とスタッフの負担も少なくないとのことである。また「損得勘定ならとっくに幕を下ろしている」<sup>11)</sup>と船木氏が語っておられるように、収支は毎年赤字続きのようである。それでも公演を続けてこられた背景には、「人々に感動を伝えたい」との思いがあったと船木氏は語っておられた。そして、「フィールドバレエを通じて、清里の人々が自分の住む地元を誇りに思ってもらえると嬉しい」と述べておられた。

今回のインタビューでは、船木氏よりこのイベントに関する一つのエピソードをお伺いした。それは、2008年の公演のことである。全盲の来場者が、クラシックバレエの音や雰囲気を感じたいと訪れたそうである。船木

氏は驚きながらも、その人のために舞台の袖で鑑賞できる席を特別に手配した。本番が終わり、その人が船木氏のところへお礼を言いに来た時のことを回顧されて、同氏は次のように語っておられた、

「最後にその女性が俺のところに来て、お礼を言うのだけでも、手を握って、今日は本当に楽しかったって言って、ギュって手を握られた瞬間、…俺は自分のやっていることに生きがいを感じるわけ。」

船木氏にはポール・ラッシュ博士という偉大な先人の記憶が今も生き生きと残っているとのことであるが、それと同様に、「その人の中にクラシックバレエの記憶が一生残っていることが何よりも嬉しい」と、船木氏は語っておられた。

## (6) 多様な価値における「平衡術」の実践

この様に、時代の変化の影響を様々な形で経験してきた清里にあって、船木氏は独自の活動を続け、地域の振興に貢献されてきた。そこには船木氏の地域の在り方に対する透徹した哲学があったように見受けられる。船木氏は、人々が「自分の能力以上の所得でも、それ以下の所得でも悩む」ように、地域にも適切な価値の水準があり、その適切な水準を保つことが重要であると考えておられた。そのためにも、地域において、多様な価値が共存し、それらが全体としてバランスを保つことが重要であると主張しておられた。船木氏が「萌木の村」を設立した目的も、この「地域のバランス」を保つことにあったことは、既に述べたとおりである。

一方、船木氏は、人々が経済的価値のみを追求した結果、価値における全体のバランスが崩れてしまうと、人間は快樂と欲望の赴くままの存在に墮する可能性があるかと危惧しておられた。このことに関して、同氏は「地域が経済的に豊かになっていった時、人々に能力が無いと欲望にしか（お金を）使えなくなる」、そして「人間は本能だけだと社会が乱れてしまう」と語っておられた。その上で、「お金を綺麗に使うというのは民度（が必要）」と語っておられた船木氏にとって、そうした事態を防ぐためには、地域の「民度」を高めることが重要であるとのことである。そのためにも、オルゴールやフィールドバレエ等、お金では買えない価値を地域の中で見出し、地元の人々がそうした価値に感動し、それを磨いていくことが重要であると考えておられた。すなわち、船木氏がオルゴール収集やフィールドバレエを始め、様々な文化事業に取り組んでこられた背景には、多様な価値におけるバランスを維持し、地域の「民度」を高める必要があるのだ、という強い信念があったためだと言えるのではないかと言うことができよう。

さらに、船木氏は、自分自身や自分の所属する組織に

ついて、常に2つの視点を持って思考するように心掛けておられると述べておられた。すなわち、「（自分について考えるときは）自分と家族、（家族について考えるときは）家族と会社（萌木の村（株））、（会社について考えるときは）会社と清里、（清里について考えるときは）清里と北杜市、（北杜市について考えるときは）北杜市と山梨県、（山梨県について考えるときは）山梨県と日本、（日本について考えるときは）日本と世界」といった形で、常に2つの視点に思考の軸足を置き、それぞれのバランスを保つことを心掛けておられるとのことである。そして、「そのバランスを崩すと、無理があるから、最終的にはどっかでしっぺ返しがあるだろう」と船木氏は語っておられた。

この様に、船木氏は、多様な価値のバランス、あるいは、組織や地域間のバランスを図りながら、様々な取り組みを実践されてきたのだと言うことができるだろう。それは、同氏が、地域における様々な価値葛藤を何とか平衡に至らせんとする、言わば、価値における「平衡術」<sup>12)</sup>を実践されてこられたとも解釈することが出来るように思われる。そして、同氏がそうした実践的態度を持つに至った背景には、ペンションブームに沸き立つあまり、あるべき平衡感覚を失い、無秩序な開発を推し進めた清里の盛衰を目の当たりにしてきた、これまでの経験があったためではないか、という推察は十分に成立し得るものであろう。

## (7) 「感動」が「必然」を量る物差し

船木氏は、地域における価値のバランスを保つ上で、地域の「必然」を看取することが大事であると語っておられた。ここで、船木氏の述べておられる「必然」とは、同氏がこのことに関連して「すべての役割は求められて（あるべき）」と語っておられたことを踏まえれば、人々からの真の期待や要請を見極め、それに応えることを通じて自ずともたらされるような、「必ず然らしむる」状態を指すものであると言えそうである。そして、そうした「必然」に至ることこそが、地域のバランスを保つことになることになると、船木氏は考えておられるようである。その反対に、奇抜な発想を編み出すことや、一時的な流行に追随し、それを表層的に模倣することは、人々の本来求めるところではなく、それ故、それは地域に根付くことはないと考えておられる。

さらに、船木氏は、「感動するものは皆が求めているもの」と語っておられるように、地域の「必然」に至る上で、人々が「感動」するかどうかを何よりも重視されていた。すなわち、船木氏にとって、人々の「感動」こそが「必然」を看取する上での重要な「物差し」であったと言えるのである。しかし、船木氏は、現代社会を評して、「（人々の）感覚が無くなったことに問題」があ

ると指摘し、次のように語っておられた、

「多くの方は感動を知らずして、他の物差しで量るわけ。決算とか、そんなものどっちでも良い。」

それでも、

「結果として、感動するものは、最後に採算がとれるでしょう。永遠に赤字ということはありません。」

毎年、多くの赤字を出しながらもフィールドバレーを続けてこられた理由は、何よりもこの「感動」に拠るところが大きいものと言えるだろう。そして船木氏は、そこに地域のあるべき「必然」を見ておられたように思われる。同氏はこのフィールドバレーを「永遠に続ける」と力強く語っておられた。

先人の意志を引き継ぎ、激動する清里において、様々な価値葛藤における平衡術を実践し、人々に感動を与えんとする船木氏の姿に、氏自身が築き上げてきた人生哲学を垣間見ることが出来るように思われる。(インタビュー時期：2008年12月13日、2009年9月4日。インタビュー場所：「萌木の村」にて。)

## 5. 「地域カリスマ」の活力の解釈学的検討

以上、3名の“カリスマ”へのインタビュー調査を基に、それぞれの実践を物語的に描写・叙述した。本章では、以上の実践描写を踏まえて、3名の“カリスマ”をその実践に突き動かした根源的活力について、関連する哲学的議論に依拠しつつ、筆者らの論考を加えることとする。

なお、以上の実践描写は、3名の“カリスマ”それぞれの解釈的世界を描出したものであり、以下の論考は、そうした独自の解釈的世界の中から、共通の性質を分析的に抽出することを通じて、“カリスマ”の実践とその活力についての統一的な自然科学的説明を与えようとするものではない点には留意が必要である。

ここに、“統一的な自然科学的説明”と“客観的立場からの解釈”とは大いに異なるものである。前者は後者の特種な一形態に過ぎぬものであり、前者のみが物事を理解する唯一の方法論では無いことを、我々は思い出さなければならない。例えば、人間の生き様や思い、ひいては感動を余すところ無く記述し尽くすことができる統一的な自然科学的説明など存在しないであろうことは、誰もが直感的に納得しうることであり違いないであろう。むしろ、統一的な自然科学的説明を求めるための分析的行為は、それぞれの解釈的世界との文脈的関連性を喪失することになりかねないとすら言うことができよう。しかしその一方で、自らの“個人的な体験”を、個人的・私的な視点からではなく、“客観的な視座”から解釈す

ることを志向することは可能なのである。これこそが、自然科学と対比される、例えばヒューム<sup>17)</sup>が志した“社会科学”の最も基本的なアプローチなのであり、本稿もそのアプローチを採用するものである。すなわち、3名の“カリスマ”とのインタビューを通じて得られた筆者らの経験それ自体は決して個別に分断されたものではないという点を前提とし、その共通経験を基に、“カリスマ”による実践の営みについて“客観的な立場”から“解釈”し、そのことを通じて、“カリスマ”の活力への理解を深めようとするものである。

### (1) “Active Passiveness”の精神

今回のインタビューを通じて、斎藤氏、加藤氏、船木氏の各氏が地域の問題に取り組むに至った背景には、地域やそこに胚胎する歴史といった何かしら個人を超越もしくは包括した全体的「状況」からの要請があったことを窺い知ることが出来る。すなわち、斎藤氏においては、川崎の歴史を後世に残すことに対する義務感があり、そこに地域からの具体的な要請が結実したと見て取ることが出来る。加藤氏においては、富浦の衰退を回避せよとの地域からの要請があったと言うことが出来る。船木氏においては、ポール・ラッシュ博士の意志を受け継ぎ、地域のあるべき「必然」に自らの活動の拠り所を置いておられたと言うことが出来る。そして、少なくとも、各氏が経験されてこられた幾多の困難や相当な労力を鑑みれば、各氏がその個人的動機から自ら進んで地域への取り組みを始められた訳ではないように推察されるところである。このことは、例えば船木氏が「すべての役割は求められてだから」と語っておられたことから窺い知ることが出来る。

しかし、以上のことは、各氏が、ただ単に自らに課された要求に受動的に従っていることを意味するものではないとすべきものと思われる。むしろ、各氏において、自らの置かれた状況に指し示された要請を察知する開かれた精神を宿し、それを引き受けることを自らよしとした決断があったからこそ、長年にわたって、地域をより良くしようと意志する自発的な活力が途切れることがなかったのではないだろうか。筆者には、様々な苦難にも関わらず、地域に献身することを決断した“カリスマ”の姿に、ソクラテスが論ずる「万やむを得ない強制と考えて、そこへ赴く」<sup>18)</sup>国家の守護者の姿と相重なるところが少なくないように感じられる。

以上の点を踏まえると、各氏は、自らに授けられた要請を積極的に感受し、それを引き受ける、言わば「積極的受動性(“active passiveness”）」とも言うべき精神的態度を有していたのではあるまいか。無論、そうした要請を引き受けることは、一個人にとって、極めて負担の重

い「受難」であったと言える。しかし、そうであるからこそ、「カリスマ」は、それを「万やむを得ぬ」ものとして引き受ける、絶対的な「情熱」を持つに至ったのではないだろうか。筆者らには、各氏のそうした「積極的受動性」の精神にこそ、活力が生じ得る契機があるように思われるのである。

## (2) 「葛藤と矛盾の平衡」と「活力」

繰り返し述べることとなるが、そうした「積極的受動性」の精神とは、ただ単に自らに課された役割に従属的に身を委ねることを意味するものではないことは、強調すべき点であるように思われる。なぜなら、そうした従属的な態度を通じては、幾多の困難にも関わらず、地域に献身する“カリスマ”の自発的な活力は生じ得ないものと考えられるためである。むしろ、「私たちは、自分が自由であるということにおいて、超越者から私たちに授けられているという意識をもつ」と論じたヤスパース(1954)<sup>14)</sup>に倣えば、“カリスマ”は、その実践の営みにおいて、「あれかこれか」<sup>16)</sup>の自由な決断を為さんとするからこそ、その決断の瞬間においてはじめて、地域や歴史といった自らを超越した存在からの要請を察知する可能性を手にすることが出来た、とも言えるのではないだろうか。それは「自由の絶頂においては、私たちの行為は必然的であるように思われる」<sup>14)</sup>という自覚であるとも言えることが出来よう。すなわち、ヤスパース<sup>14)</sup>に拠れば、人間は自分が自由であればあるほど、人間本来の自覚として、その自由は、自分以外の自分を超越した存在から委ねられているとの認識を持つに至るのである。そうであるからこそ、船木氏は、地域の「必然」を求めながら、「人間に一番大事なことは自分で決定すること」と述べておられたのではないだろうか。そうした意味において、“カリスマ”の精神には所謂「独立自尊」<sup>15)</sup>(「心身の独立を全う」し、社会に献身する「其身を尊重」せんとする態度)の構えが備わっているとも言えることが出来るであろう<sup>15)</sup>。

そしてそうした「主体性を伴う自由なる決断」は、常に、現実存在する矛盾・葛藤の全てを一手に引き受けつつなされるものであることを踏まえるなら、先に述べた“カリスマ”の「積極的受動性」の態度とは畢竟、「独立」(或いは「自由」「積極性」と「従属」(或いは「必然」「受動性」と)との間の矛盾・葛藤を弁証法的に総合せんとする「実践的態度」なのだと解釈することができるであろう<sup>16)</sup>。ここでキルケゴール(1981)<sup>16)</sup>が「あれかこれかのどちらかを選ぶという絶対的な情熱があつてこそ、個人は自分自身との一致を決意することができる…矛盾の原則というものは個人を力づけて、自分自身にたいして忠実ならしめるものである」と論じてい

る言葉を引用するなら、地域の“カリスマ”は、「理想」と「現実」、「個人」と「集団」、「過去」と「未来」といった、様々な矛盾や葛藤を一手に引き受け、そこに平衡をもたらさんと意志する者であると言って差し支えないであろう。

事実、船木氏は、経済的価値のみを追求した清里開発に疑義を呈し、多様な価値の葛藤において平衡を保つことの必要性を強く主張しておられた。加藤氏もまた「枇杷倶楽部にいると自分の利益、地域の利益等、いろんなことを考えないといけない。そのバランスを保つことがこの事業の醍醐味」と語っておられたように、枇杷倶楽部の利益と地域全体の利益、あるいは、地域内の様々な利害対立において、何とか平衡を保持しようと取り組んでこられたものと考えられる。そして斎藤氏は、「文化不毛の街」川崎に、産業化・工業化の「過剰」を見てとり、そこに平衡を取り戻そうとして、歴史と文化の振興に献身してこられたと解釈することは十分に可能であろう。さらに言えば、同氏が川崎の歴史についての感覚を失わないのは、詰まるところ、西部(2000)<sup>23)</sup>において指摘されているように、「歴史」及びそこに胚胎するであろう先人の知恵たる「伝統」にこそ、現実の葛藤の中であるべき価値判断を指し示す「平衡感覚」が貯えられているとの信念があつたからこそではないかと推察することも可能であろう<sup>17)</sup>。そもそも、仮に川崎の歴史・文化事業に取り組む理由が、歴史の復古それ自体を大事とする、因習主義的な動機に基づくものであつたとするのなら、大川崎宿祭りを始め、川崎の歴史にまつわる数々の取り組みを「命懸けでやる」との覚悟は生まれなかつたに相違ないのである。

この様に、諸葛藤において何とか平衡を保持せんとするところに、“カリスマ”の生に活力が漲る源泉があると言えるのではないだろうか。なぜなら、相対立するものの中で緊張を保ち、それぞれが過剰に陥ることを防ぐためには、そこに過剰な努力が必要とされると言えるためである。西部(1996)<sup>12)</sup>の比喩を用いれば、それはさながら「曲芸師が一本の綱の上で平衡を保とうとするときにおびたしい緊張と活力が彼の心身をつらぬいている」ことになぞらえられるものと言えよう。

つまりは、葛藤や矛盾の平衡を保守せんとする実践的態度にこそ、“カリスマ”の活力の本質が有り得るものと考えられるのである。そうした平衡の実践とは、「綱渡り師」が一度その緊張を解いた瞬間に綱から落ちるように、“カリスマ”をはじめ当該地域に住まう人々がその努力を怠るや否や、当該地域は平衡を失し、やがて衰滅するに至るといふ危機の意識を伴うものであると言える。このことは、斎藤氏にあって、川崎という「歴史的共同体」の衰退に対する憂慮の念があり、加藤氏にあって、富浦という「生命体」の衰退に対する危機感があり、

船木氏にあって、より直接的に、清里という「地域のバランス」を失うことに対して「清里はいずれ沈没してしまう」<sup>11)</sup>との危惧の念があったことから窺い知ることが出来る場所である<sup>8)</sup>。

そして、そうした危機の意識があるからこそ、「綱渡り師」が命を賭して綱を渡るように、“カリスマ”の平衡を目指す実践的営みに「真剣さ」が備わるものと考えられる。そして、この平衡を保たんとする真剣な営みの果てにおいてはじめて、「理想性とは相対立するものの均衡である」とキルケゴール(1981)<sup>16)</sup>が述べたように、地域のあるべき「価値」が見出されるのではないだろうか。そうした「価値」こそ、例えば、斎藤氏が求めておられた「子々孫々の誇り」であると言ってよいように思われるのである。

### (3) 『現代の批判』

以上、地域の“カリスマ”が「積極的受動性」の精神を有していることを指摘した上で、そうした精神を持って、様々な葛藤において平衡を保たんと実践するところにこそ、“カリスマ”の生が活力に満ち溢れたものになる所以があることを解釈学的に論じた。本節では、最後に、以上の論考を踏まえた上で、そうした“カリスマ”の実践（とそれに対する筆者らの解釈）が示唆するところについて、デンマークの哲学者キルケゴール(1981)<sup>16)</sup>の著書『現代の批判』を基に、更なる解釈を加えることとしたい。なぜなら、以上の解釈学的議論は、以下で見るように、キルケゴールの論じた『現代の批判』と類似するところが少なくないものと考えられ、そこに現代社会に対する重要な含意が有り得るものと思われるためである。

さて、セーレン・キルケゴール(1981)<sup>16)</sup>は、『現代の批判』において、自己の矛盾に耐えて生きながら、その矛盾の中にあつて「あれかこれか」の選言的な決断を為さんとするところに、人間の実存の可能性を指摘するとともに、そうした「矛盾の原則」を排した時代に対して、「分別の時代」「情熱の無い時代」「束の間の感激にぱっと燃えあがっても、やがて小賢しく無感動の状態におさまってしまうといった時代」として徹底的な批判を与えている。ここで、地域の“カリスマ”とは、まさにキルケゴールが論ずる、「矛盾の原則」に耐えながら、「あれかこれか」の決断を為す精神の力を宿し、それを実践してきた者に他ならないであろうことは、上述の論考の通りである。

その一方で、例えば、船木氏が「多様な価値ではなく、(経済性という)一つの価値で色々なものを測って、それをモデルとして、そしてそれが正しいと決めつけているような気がしてならない」と指摘されていたことは、現代において「矛盾の原則」がますます排除されつつあ

るという可能性を示唆しているものと考えられる。すなわち、例えば金銭的な価値一つを取り上げても、それは貨幣の交換を可能にする信頼や協調といった非金銭的な価値なくしては成立し得ないといったように、物事を2面的(あるいは多面的)に捉え、そこに平衡を与えようとする意識が人々において希薄化しつつあることに対する懸念を、同氏の発言から読み取ることが可能であるように思われる。

ここで見方を変えれば、“カリスマ”の活動の背景には、そうした「矛盾の原則」の排除とそれに伴うであろう価値の「過剰」に対する危機感があつたものと解釈することも可能であるように思われる。すなわち、斎藤氏にあっては、伝統に対する畏敬の念を失した過度な「進歩主義」に対して、加藤氏にあっては、(富浦という)地域全体に対する配慮を失した過度な「個人主義」に対して、船木氏にあっては、文化に対する敬愛の情を失した過度な「拝金主義」に対して、それぞれが平衡を逸しつつあるとの危惧の念があつたと見て取ることが出来る。さらに言えば、そうした価値の過剰の中で、人々が「失感症」に陥りつつあることが、「(人々の)感覚が無くなったことに問題がある」「多くの人は感動を知ら(ない)」との船木氏の指摘において暗示されているものと考えられる。

この様に、“カリスマ”の実践的活動に対する以上の議論より、彼らと直接間接に関わる周りの人々において、あるべき「矛盾の原則」が排除されつつあり、それ故、自由な決断を為す領域がますます狭くなりつつあるという現代の様相が却って浮き彫りになっているように思われる。しかし、キルケゴールの言を借りつつ端的に言うなら、「善か悪かという質の上での対立」<sup>16)</sup>を排した「非決断性はすでに悪」<sup>14)</sup>とすら言うべきものですらある。なぜなら、矛盾・葛藤を総合せんとする努力を放棄した非決断的態度は、人間の生そのものを否定するものと言えるのであり、そこには「絶望」しか見出されないためである。そうであるからこそ、キルケゴールは、人々がそうした総合化への精神の上昇運動を止めた時代を「水平化の時代」と呼び、そこに次のようなグロテスクとしか言いようのない描写を与えたのである。

「多くの人が、おそらく絶望の悲鳴を上げることだろう、…見よ、水平化の鋭い鎌がすべての人々を、ひとりひとり別々に、刃にかけて殺してゆく。」<sup>16)</sup>

そして、そうした「水平化の時代」にあっては、「英雄(すなわち傑出者、それぞれ異なった位置に応じて卓越している人々、指導者たち)」には、その偉大な事業に対する讃嘆を得ることなど望むべくもないことは、キルケゴールの指摘するところである<sup>9)</sup>。そして、この指摘と加藤氏と船木氏の以下の発言との類似性は、少なく

とも筆者らにとっては、単なる偶然のこととは思われないのである。

「世の中の人というのはね、自分が思うように評価する訳じゃないし、それが世の常だろう。仕方がない。」(加藤氏)

「やり遂げるまでは人の見えないことをやる。皆に理解してって言ったって理解なんて出来るわけがない。…(でも)それを信じてやるわけだから。(周りの人が)見えて理解できるようになるまでは批判の連続。…その時に負けない人間がリーダー(である)。」(船木氏)

しかし、「目立たない者」たる“カリスマ”には敗北しが約束されていないという訳ではないことは付言すべきであろう。むしろ、キルケゴールが指摘するように、「目立たない者は受難によって水平化に打ち勝つ」ことが許されているのである。それは同時に、「目立たない者」の「生き方の法則」をも規定するものであると、キルケゴールは述べている。すなわち、

「その法則(生き方の法則)は支配するのでも、操縦するのでも、指導するのでもなく、受難によって奉仕することである。」<sup>16)</sup>

この「受難によって奉仕すること」こそ、“カリスマ”の心身を貫く「積極的受動性」の精神的態度に他ならないものと言えよう。そして、そうした“カリスマ”の実践とは、「水平化」に対する人生を賭した抵抗であったと解釈できるのではないだろうか。さらに言えば、加藤氏の以下の発言は、そうした抵抗には「勝利」の可能性が幾ばくかでも残っていることを我々に力強く語りかけているように思われる。

「誰と勝負しているか、誰と闘っているか分からなかったけど、この勝負勝てる。」(加藤氏)

築土構木を為すことを通じて地域、国民、社会、そして、公共に“奉仕”することを本分とするのが土木技術者であるとするなら、そうしたあるべき土木技術者もまた、それぞれの“カリスマ”が直面している“現代の受難”と同様の“受難”を、それぞれに受けているに違いない。しかし、加藤氏が直感したように、その受難によって何も全ての“カリスマ”や土木技術者が敗北することが決定づけられているわけでは決してない。以上の解釈を通じて明らかにされた、全てが「水平化」され、「情熱のない時代」を迎えた現代日本の憂うべき状況の中にあってもなお、快活に振る舞い続ける精神——、それこそが、公共に奉仕することを決意した者に求められる精神の有り様であるに違いない。斎藤氏は言う、

「もう限界だと自分で思いながらもね、…死ぬまで頑張っ  
てやろうかなと。」

土木技術者もまた、こうした精神の有り様があってはじめて、為すべき築土構木を成し遂げる可能性の幾ばくか

を手に入れることができるに違いないのである。

**謝辞：**インタビューをお引き受け頂きました斎藤文夫氏、加藤文男氏、船木上次氏の各氏より、これまでのご経験・ご体験について大変熱心にご教示頂きました。各氏のこれまでのご尽力に深甚なる敬意を表するとともに、多大な協力を頂いたことを付記し、ここに深謝の意を表します。

## 脚注

- [1] この立場は、ヒューム(2004)<sup>17)</sup>が重視した「公平な観察者」の立場とも呼べるものである。
- [2] それは、さながら共同関係においてお互いに協力しあう中で相手が理解されることに見られるような、それ自体実践的意味合いを含んだ行為であると考えられる。
- [3] シュライエルマッハー(1984)<sup>18)</sup>は「語る者が目の前にいること、彼の精神的存在の全体が賭けられているような生き生きとした表現、ここで思想が共同生活の中で展開されていくさま、これらすべて」が「生の瞬間」に対する理解を促すことを指摘している。本研究の目指すところも、そうした記述行為であると言える。
- [4] この様な「物語」を通じた思想の伝染と、それが人間行動を活性化する重要な契機になり得ることについては、社会心理学<sup>19)</sup>や近年では経済学の分野<sup>20)</sup>においても指摘されているところである。
- [5] 以上の「独立自尊」の精神については川端(2007)<sup>21)</sup>に詳しい。
- [6] 形式的には、「弁証法」とは、ある「命題」(テーゼ)とそれと矛盾する「反命題」(アンチテーゼ)に対して、その両者を本質的に総合した命題である「合」(ジンテーゼ)を得ようとする方法論を指す。
- [7] このことについて、チェスタトン(1905)<sup>22)</sup>は、「(善き伝統たる)正統はいわば荒れ狂って疾走する馬を御す人の平衡だったのだ」と指摘している。同様に、西部(2000)<sup>23)</sup>は、「伝統の精髓は何かというと、平衡感覚である」と指摘している。
- [8] ちなみに、進化論の分野において、集団内の利他的傾向(あるいは、集団全体の利益に配慮する傾向)が低下し、利己的傾向(個人の利益に配慮する傾向)が増進した結果、集団全体の活力が低下し、その集団が淘汰される(滅亡する)現象は「集団淘汰」と呼ばれている(c.f. Sober & Wilson, 1998<sup>24)</sup>)。そして、藤井(2009)<sup>25)</sup>は、そうした集団淘汰原理が、集落や街、そして、国家や文明の崩壊に共通する本質的原理であることを指摘している。本文の記述は、斎藤氏、加藤氏、船木氏の各氏が、それぞれの地域を

一つの「集合体」と捉え、それに対する「集団淘汰」の圧力を肌身で感じておられたという可能性を示唆するものであるとも言える。

- [9] キルケゴールは、「情熱の時代」においては、「英雄」は「目立つ存在」として人々から讃嘆を浴びる一方で、「水平化の時代」においては、彼らは「目立たない存在」として人々から讃嘆を浴びないばかりか、「妬み」をも買うと述べており、以下のような比喩的な描写によって両者を対比している。

「これが情熱的な時代であれば、そんな（生命を落とす危険のある）沖合まであえて出かけていく勇者は大衆の喝采を博することだろう。大衆はその勇者の身になって、またその勇者とともに、決死の決断に身ぶるいすることであろう。その勇者が沈没したら、大衆は勇者を哀惜することだろう。もしその勇者が宝石を手に入れたとしたら、大衆は彼を神のごとく崇めることだろう。ところが情熱のない反省的な時代にあつては、事情はまったく違ってこよう。

“あんな沖のほうまで危険を冒して出て行くなんで、骨折り損というものさ。だいいち、愚かで滑稽だよ”とみんなが異口同音に言い、分別顔をしてお互いの賢明さをお互いに賞賛し合うことだろう。」<sup>16)</sup>

#### 参考文献

- 1) 羽鳥剛史, 藤井聡: 地域コミュニティ保守行動に関する進化論的検討: 階層淘汰論に基づく利他的行動の創発に関する理論的分析, 社会心理学研究, 24(2), 87-97, 2008.
- 2) 国土交通省: 『観光カリスマ百選』, 2005.  
[http://www.mlit.go.jp/kisha/kisha05/01/010318\\_4.html](http://www.mlit.go.jp/kisha/kisha05/01/010318_4.html)
- 3) ニーチェ(著), 木場深定(訳): 善悪の彼岸, 岩波文庫, 1970.
- 4) デイルタイ(著), 久野昭(訳): 解釈学の成立, 以文社, 1981.
- 5) ボルノー(著), 西村皓, 森田孝(監訳): 解釈学研究, 玉川大学出版部, 1991.
- 6) ギデنز(著), 松尾精文, 藤井達也, 小幡正敏(訳): 社会学の新しい方法規準—理解社会学の共感的批判, 而立書房, 2000.
- 7) 大川崎宿祭り実行委員会: 2001東海道宿駅制定四百周年記念大川崎宿祭り記念誌, 2002.
- 8) (社)日本観光協会(編): 観光カリスマ: 地域活性化の知恵, 学芸出版社, 2005.
- 9) 著者不明: 清里メルヘン環境研究, ACROSS, 10月号, 1988.
- 10) 船木上次: 清里パレエ 夢追い20年, 読売新聞, 週末寸言, 2009年8月1日.
- 11) 山梨日日新聞, 風林火山, 2009年7月1日.
- 12) 西部邁: 思想の英雄たち, 文藝春秋, 1996.
- 13) プラトン(著), 藤沢令夫(訳): 国家, 岩波文庫, 1971.
- 14) ヤスパース(著), 草薙正夫(訳): 哲学入門, 新潮文庫, 1954.
- 15) 福沢諭吉(著): 福沢諭吉選集(第3巻), 岩波書店, 1980.
- 16) キルケゴール(著), 斎藤伸治(訳): 現代の批判, 岩波文庫, 1981.
- 17) ヒューム(著), 斎藤繁雄, 一ノ瀬正樹(訳): 人間知性研究一付・人間本性論摘要, 法政大学出版局, 2004.
- 18) シュライエルマッハー(著), 久野昭, 天野雅郎(訳): 解釈学の構想, 以文社, 1984.
- 19) Schank, R.G., & Abelson, R.P.: *Scripts, Plans, Goals and Understanding*. New York: Wiley, 1977.
- 20) アカロフ, シラー(著), 山形造生(訳): アニマル・スピリット, 2009.
- 21) 川端祐一郎: 「独立自尊」はなぜ必要なのか, 塾生通信, 20, pp.1-4, 2007.
- 22) チェスタトン(著), 安西徹雄(訳): 正統とは何か, 春秋社, 1995.
- 23) 西部邁: 国民の道徳, 産経新聞社, 2000.
- 24) Sober, E., & Wilson, D.S.: *Unto others: The evolution and psychology of unselfish behavior*. Cambridge, Harvard University Press, 1998.
- 25) 藤井聡: なぜ正直者は得をするのか, 幻冬舎, 2009.

(2009.11.1 受付)

## A HERMENEUTICAL STUDY ON VITALITY OF “REGIONAL CHARISMAS”: NARRATION OF “CHARISMAS OF TOURISM” BASED ON INTERVIEW SURVEY

Tsuyoshi HATORI, Satoshi FUJII and Tetsushi SUMINAGA

As suggested from the case of “the 100 charismas of tourism”, there are many real-world examples indicating that local community has been vitalized through voluntary contributions by one or a few people who have exerted considerable energies and efforts to solve local problems. This paper pointed out the importance of an hermeneutical approach to understand vitalities of such “charismas”. Then, based of this approach, the paper described the practices of “charismas” from an interview survey in order to understand their vitalities to volunteer for local community.